



れを読まれるころには、会期は終わっているかもしれないが、現在松江歴史館にて「その技神のごとし 小林如泥」が開催中である。松江藩お抱えの指物師小林如泥の仕事をこれほどまとまって目にするのはなかなかない。

ばくも見に行つたが、その超絶技巧に心底驚いた。知り合いの職員にそれを言ったら、

「どのようにして作つたのか今もってわからないそうです」

と教えてくれた。如泥は作品以外何の記録も残していないし、弟子も取らなかった。さらに、一つ拵えたら使つた道具はすべて処分してしまつたということだから、残念ながら技をたどるすべがない。技術を伝えることに興味がなかつたのか、空前絶後の存在と自覚して模倣されるを嫌つたか、理由は分からない。

小林如泥を見出したのは、大名茶人として著名な第十代松江藩主松平不昧で、この稀代の目利きの庇護を受けてひたすらに技量を磨いたとおぼしい。

小林如泥の名前を耳にしたのは、まだこどものころだつたと思うが、詳しく知つたのは長じてから読んだ石川淳の『諸国崎人伝』を通してだつた。そこには如泥にまつわる様々なエピソードが記されていて、タイトルにふさわしい変人つづりがさすがの名文でいきい

きと描かれている。

松江歴史館でこども落語をさせてもらうようになつて、館の依頼でいくつか松江城にまつわる怪異譚や史話を一席に仕立てた話はすでに書いたが、実は如泥展と相前後して、如泥に関する資料も渡されている。一通り目を通したが、石川淳が素描に用いた以外のエピソードはそこにはなかった。つまり如泥の人となりや作品をたどる資料はごくわずかで、新しいものはないようなのだ。

さて、この小林如泥がこども落語の一席になり得るか。今もずっと考え続けている。落語には、名人、上手を描いた一ジャンルがあつて左甚五郎の登場する話だけでもいくつもある。それを換骨奪胎してならんものだろうかと思うのだが、どうにも形になつてくれない。たぶんこれは、如泥本人がおもしろすぎるのだ。くそ真面目な人間やおそろしい妖魔などにおもしろいことをさせて笑うことはやりやすいのに、元々常軌を逸したおもしろい人間を創作でよりおもしろくするなんてできっこないのだ。

ネズミの彫り物競争をする有名なエピソードがある。名人対決は如泥の圧勝に終わる。ご興味あらば、その理由を先の本などで当たりたい。こんなの落語にしたならそれこそ色あせてしまう。

老い老いに

木幡智恵美

37

娘

の子どもが小さい頃は、熱を出すすゝ我が家で預かることがよくあつた。上が五年生、真ん中が三年生、末っ子が年長となつたこの頃はそれがほとんどなくなつて

二千年の日記を読み返すと、我が長女は高校二年生、長男は中学一年生、二男は小学校四年生になつてゐるというのに、三人それぞれが熱を出したり、腸感冒になつたりして学校を休み、病院通いをしてゐる。特に長男は頻りに身体を壊し、年が改まつて三か月経つていない時の日記にはこう書かれてゐる。「義一は厄年のようだ。風邪三回、自転車事故。何とか厄払いをしなくちゃ」。産まれてからずっと反抗期のような長女と、やんちゃでいたい放題言いたい放題の二男に挟まれた長男には反抗期のようなものがなかつた気がしてゐたが、それでもなかつた。長男は何かあると義母のところに逃げ込み、そこで癒されてゐた。けれども中学生になり、友だち関係で思うようにならないことが重なり、体調も崩しがちで、押さえきれないものがあつたようで、結構私にぶつかつてきてゐる。その頃の日記には長男についての記述が一番多い。自転車事故も、そんな頃に起こしてゐる。その日私は日曜出勤で、夕方家に帰ると長男の自転車がな。何かあつたかと飛んで家に入ると、夫から事故のことを聞かされた。幸いヘルメットをしていたのでかすり傷で済んだが、坂道を下つたところで車にぶつかり、自転車は使い物にならないほど壊れてしまつたとのこと。相変わらず子どものことで悩み振り回される日々の中で迎えた年度末、私は二年間の中学校勤務を終え、今度は鳥取県との県境に近い小さな小学校へと転勤することになった。四月一日の日記にこうある。「『ちよつと母さん、有珠山が大爆発した』という夫の朝の第一声。今日はエイプリルフルだから質の悪い嘘だろうと思つたが、実際あちこちで噴火し、皆避難してゐる。小学校など、教職員が寝ずの番だ」

夕焼け通信八年目に突入する頃、有珠山が大爆発を起こしたのだ。過去に何度も爆発しているこの山を北海道大学有珠火山観測所がずっと観測を続けていたという。そこが一四四時間以内に爆発すると発表し、一四三時間後に実際に爆発が起きている。お陰で適切な避難誘導が行われ、死傷者は出てゐない。防災対策にはそうした地道な努力が必要なのだ。

30代フリーター トランプ政権は、ハーバード大学の留学生受け入れ認可を停止するなど、エリート校への圧力を強めている。

年金生活者 世界に抜きん出た大量のエリートの養成は、古代以来どの「帝国」も取り組んできた。トランプ政権の反エリート主義は、「世界帝国」としてのアメリカを解体する作業の一環ということができる。

「帝国」は域内に多様な民族・文化を抱える。その統治には高度な知識と技能を持つエリートの存在が不可欠だ。中国は官僚を身分に関係なく選抜する科挙制度を設け、ローマ帝国は言語による支配の手段としてラテン語と修辞学を身に着けた指導層を育てた。

多様な勢力から成る「帝国」の統治は分権的にならざるを得ない。そのぶん皇帝など中央の権力は制約を受ける。それを補うのが域外の服属国の忠誠だ。それを担保するために、「帝国」の文化を身に着けたエリートを服属国の中にも育てなければならぬ。

が出した。斎藤は「指示したという認識はない」と主張している（5月28日朝日新聞朝刊）。別の第三者委員会から、内部告発者探しをしたことを公益通報者保護法違反と認定され、告発を理由とし懲戒処分を違法・無効とされたときも「対応は適正だった」と繰り返すなど、「法の支配」を無視する点でトランプと似ている。

年金 その結果「オウングロー」になつて点でも似ている。政府からは知事の公益通報者保護法の解釈は公式見解と異なるとダメ出しされる始末だ。

斎藤は維新の会と自民党の推薦で兵庫県知事に初当選した。その維新は「不祥事のデパート」と言われるほど議員や首長の不祥事や犯罪が多いことで知られる。そうした法令順守の欠如はもとをたどれば、党の理念の「身を切る改革」に行き着く。

「身を切る改革」とは政治・行政の無駄を省き、民意を重視するということだ。それ自体はいいが、民意の代表を強調するあまり、政治や行政の経験

中国による日本からの遣隋使、遣唐使の受け入れ、アメリカのアイビー・リーグなどの名門大学への大量の留学生受け入れはそのための仕組みだ。

その停止は、自由貿易体制の破壊、NATO離れ、WHOからの脱退などと並ぶ「帝国」の装置の解体の一環にほかならない。

30代 トランプ政権は中国人学生のビザを「積極的に取り消す」とも発表した。米國政治が専門の三牧聖子は「米國は留学生を広く受け入れることによつて、国力を高めてきた。優秀な人材は今後、米國留学を避けかねず、中國からすれば米國のオウングローに見えるだろう」と指摘している（5月30日朝日新聞朝刊）。

年金 トランプのオウングローはそれだけに限らない。覇権国家Ⅱ「世界帝國」の座からずり落ちつつある現在のアメリカにとつて、基軸通貨ドルの力による自由貿易体制の維持や、圧倒的な軍事力による安全保障システムの提供など、かつて世界支配の手段だった

のない民間人をたくさん候補者に立て、それが不祥事の要因のひとつとなつている。

政治・行政に携わる人間は常に法の制約を受ける。その経験を積んだ政治家や官僚は法に則つて行動するのが習慣となつている。だから、そこからの逸脱には慎重だ。しかし、民間人はふだんそれほど法を意識することはない

装置が逆に重荷になりつつある。

それらを高関税やNATO離れによつてリストラしようとしているのがトランプだ。しかし、世界中の国々と緊密につながつたそれらのシステムを解体するには時間と手順を要する。都市の密集地で行われる建物の解体が慎重に進められるのと同じだ。

トランプはそれを無視し、一気にやろうとしている。それが彼の売りであり、支持を集める要因となつている。だが、それは密集地の建物を解体するのに爆弾を使うようなものだ。犠牲は避けられない。突然の高関税はアメリカを離れて中國寄りになる国々を出現させ、NATO離れはロシアのウクライナ侵略を既成事実化させる要因のひとつになつている。トランプは「オウングロー」になつた。

30代 兵庫県知事の斎藤元彦らを内部告発した県幹部の私的情報を前総務部長が県議に漏洩し、それが知事と元副知事の指示のもとに行われた可能性が高いとする報告書を県の第三者委員会

い。「法の支配」は政治家にも官僚にも民間人にも等しくおよぶ原則だが、現実には民間人がじかにそれを経験することは政治家や官僚に比べるとはるかに少ない。

だから、民間人がいきなり行政組織の長になつたり、首長や議員に当選したりすることの多い維新では、「法の支配」に鈍感になつてしまふ。まして「身を切る改革」となると、既存の政治・行政組織の解体に前のめりになるあまり、法の無視にまで至つてしまふ。政治経験のないまま大統領になつたトランプが法を無視する姿とそれは重なる。

30代 斎藤は総務省の官僚だったのだ、法令順守の訓練は受けきたはずだが。

年金 なぜかそれが身に着かないまま、維新が知事の大阪府の財政課長になり、維新の体質に染まつたのかもしれない。彼の掲げる「改革」がどこかで「法の無視」と接続したと考えられる。

ニュース日記 971
中村 礼治

オウングローたち